

## 第4回設楽ダム環境検討委員会 議事概要

○日時：平成22年3月5日（金）09:00～12:00

○場所：桜華会館4階「松の間」

○出席委員：松尾直規 委員（委員長）、小笠原昭夫 委員、西條好迪 委員、田中正明 委員、森誠一 委員

### ○議事概要

#### (1) 設楽ダム建設事業について

委員：河川水辺の国勢調査は、設楽ダムの調査地域に重なる範囲で実施されないのか。

河川水辺の国勢調査の中で調査が継続的に行われると、事業が一時凍結し、その後再開した場合でも、調査をやり直す等の無駄が生じないのではないか。

事務局：現時点では、設楽ダム予定地域周辺では、河川水辺の国勢調査は実施していない。

委員：できるだけダムに頼らない治水とあるが、ダム以外に治水効果があるものはないのか。

事務局：堤防拡幅、河床掘削等があり、ダムとの治水効果の比較検討を行っているが、総合的な検討の結果、ダムが治水に一番良いと判断している。しかし、新たな評価軸を現在検討しているので、その結果により変わるかもしれない。

#### (2) 各委員からの指摘とその対応について

委員：ヤマメとニッコウイワナの扱いについて、放流が行われているか分からないのか。

放流であれば自然分布ではないということがより明確になる。

事務局：ニッコウイワナについては近年では放流されていないが、昭和50年代頃に行われており、現在その時の個体がわずかに残っていると考えられる。ヤマメについてもなにかの形で移入したと考えられる。

#### (3) 平成21年度の工事実施状況の報告

委員：資料内に記載されている平成21年度工事区間内に位置する重要な種の具体的な種名は分からないのか。専門家の立場から植物の場合に移植すべきか、標本として記録を残すべきかを助言したいのだが。

事務局：公開の場なので、種名は伏せている。なお今回、図面の重要な種に植物は含まれていない。

#### (4)平成 21 年度の現地調査結果の報告

- 委員 : P19 のグラフだが、平成 16 年までと平成 17 年以降を比較すると、平成 16 年までは SS 負荷量等にバラツキがある。平成 16 年までと平成 17 年以降に何かその要因があるのか。このバラツキは当然の結果なのか。
- 事務局 : 平成 16 年以前は、出水後に調査を実施したことがあったためと考えられる。現在は出水後の調査は行っていないため、バラツキが小さいと考えられる。
- 委員 : 同じ流量のところでもバラツキがある。上流域の植生等が経年的に変わってきている等の理由によりデータのばらつきが出ているのかもしれない。流量が少ないところでは、人為的な排水等によりデータにバラツキが出ることがある。
- 事務局 : P11 の八橋地点における結果では、出水があるときに SS が高くなっている傾向にある。また、昭和 59 年ごろは BOD が 2mg/L、COD が 10mg/L 以上といった値を示し、そのときに SS も高くなっている。昭和 59 年ごろは生活排水の影響があった可能性がある。
- 委員 : P28 にあるアケボノユレイグモの移植実験候補地は、人工林であるため、将来、間伐の可能性が考えられ、それに伴い環境が変わるかもしれない。
- 事務局 : 現在、選定している移植候補地は実験候補地である。最終的な場所ということではない。今後、移植手法を検討していくなかで、最終的な移植実験候補地を検討して、維持管理を含めて考えていきたい。
- 委員 : イチョウウキゴケは水田の管理と密接に関係する。言い方をかえると水田雑草ともいえる。水田環境からどの程度異なる湿地環境で生育が可能であるかを確認する必要がある。
- 事務局 : 湿地整備の検討会の中で、委員の意見を踏まえながら検討していきたい。
- 委員 : 設楽ダム建設事業で、ダムのコンクリートにより溶出する物質があると思うが、現在そのような成分が河川に流れているのかないのかを調べると良い。
- 事務局 : 工事の進捗とともに、委員の意見を踏まえながら検討していきたい。
- 委員 : 藻類については、確認された株が少ないため、移植は難しいものと考えられる。今後の確認も難しいと考えられ、確認できた場合、移植等の対応をすると良い。しかし、出水で流れることもあり、標本で残しておく方が良い場合も考えられる。また、イトゴケやアメリカフラスコモについては、それぞれを対象とした調査において確認されていないことから、おそらく生育していないと考えられる。

#### (5) 魚類検討会の報告

委員 : 調査項目として、水質、底質のところに亜鉛があるのはなぜか。

事務局 : 環境基準の内、生物に影響を与える項目として選定されているためである。

委員 : ネコギギの産卵に対する 1 年目から 2 年目の生存率はどれくらいか。年を越したものは生存率が高まるのであれば、放流実験では 1 年目のものよりも、1~2 年育てたものが良いのではないか。

委員 : 人工化で飼育すると野外条件、特に採餌等の適応ができない場合も想定されるため、長く飼育しすぎるのもよくないと考えている。

委員 : ネコギギ以外の魚種でアカザが確認されているが、アカザも減少傾向にある。豊川でもアカザが減少傾向もあるので、検討が必要ではないのか。

事務局 : ネコギギ以外の希少種についても順次調査の実施を検討している。

委員 : ナガレホトケドジョウやカジカについても検討を実施している。

#### (6) 猛禽類検討会の報告

委員 : クマタカの 3 ペアは年によって個体が入れ替わっていることはあるのか。また、出現状況でクマタカだけ 213 例あり圧倒的に多いように見える。

事務局 : 繁殖シーズン内における個体識別はされているが、複数年のシーズンにおける識別はできていない。そういう観点から考えると、ペアの入れ替わりは必ずしも否定できない状況である。また、出現数については、クマタカが多く確認されているため、こういう数字になっている。

委員 : B ペアと C ペアについて、去年までの営巣地と変わったことについて、営巣木が無くなったから移動したわけではないのか。

事務局 : 昨シーズンの営巣木が残っており、営巣地を移動したことが確認されている。

#### (6) 湿地整備検討会の報告

委員 : 湿地環境の整備では、維持管理が一番重要かと思うが、維持管理についての検討は行っているのか。

事務局 : 湿地の管理をする委員会も立ち上げていて検討している。

委員 : B ペアと C ペアについて、去年までの営巣地と変わったことについて、営巣木が無くなったから移動したわけではないのか。

事務局 : 昨シーズンの営巣木が残っており、営巣地を移動したことが確認されている。

委員 : 景観の写真を撮るとか、継続すべきものをぜひ整理いただきたい。

事務局 : 簡易的なものになるかもしれないが、河川パトロールの一環で写真撮影等をやっていきたいと考えている。

以 上